

# ヒミコの王権——宗教的権威の起源

大内 建彦

## 1 はじめに——古代国家の画期をめぐって

従来の学校の教科書の記述に従えば、わが国の古代国家成立にいたる史的過程<sup>プロセス</sup>は、およそ以下のように描き出される。すなわち、中国の文獻に「倭国」や「邪馬台国」などの国名やその王の記事があらわれはじめる紀元一世紀から三世紀の頃、各地に国あるいはその連合体なるものが萌しはじめ、この期の末から四世紀初めには広域にわたる「倭国」の連合体<sup>ユマト</sup>王権が成立する。この時期に踵を接して、つまり三世紀と四世紀の交前後から五世紀前半にかけて、一部東北地方と南九州を除き、大和、河内、和泉など、のちの畿内を中心に、北は北関東から南は中部九州までほぼ列島全域をおおって、巨大古墳としての前方後円墳が爆発的な勢いで築造されるようになる。しかもこの巨大古墳の造営には、奈良盆地から大阪平野にかけての王畿を中心に、各首長層間の政治的秩序の形成が絡み、そうした身分制的秩序を背景に、その墳形や規模に一定の規格規制が伴っていたことが解析されている。そして畿内の墳墓が最大規模に達する五世紀中葉頃までに、畿内の王権を核とする統一政権たるヤマト政権が形成されるに至る。この統一政権こそがのちの大和朝廷につながるもので、この政権は八世紀成立の『古事記』『日本書

紀』(以下、記紀と略称)に記される応神・仁徳から雄略といった天皇称号をもつ王の系譜にほぼ該当し、彼らは当時、大王と称して君臨し、中国に使者を派遣して冊封をうけ、中国の皇帝に対して代々「倭王」と称したとされている。この奈良盆地に生まれたヤマト政権は、五世紀後半までにはこの列島のうち、北関東から中部・南九州にまで広がる領域を支配していただけではなく、四世紀末からは朝鮮半島にまで進出していたのだともされている。そしてひきつづき六世紀、七世紀と、さまざまに国家機構や政治制度あるいは社会組織などに広く近代化を模索しつつ、最終的に律令国家体制を析出するにいたると、およそこのように叙述される。

ところで、先の朝鮮半島への進出という点と、六、七世紀史としてのさまざまな国家的社会的システムの構築という問題点に関しては、さまざまな異論や議論も数多く今は措くとして、「邪馬台国」を国家の端緒とみ、それが大まか五世紀から七世紀にいたる間に、原始社会あるいは前古代社会を脱し、本格的な国家の成立をみたとする歴史像が一般論として広く流布しているといつていい。

ところで、このような教科書的記述にみられるように、「国のはじまり」といい、あるいはそれにつづく五世紀から七世紀にわたる「国家」的統一といい、なだらかでリニアルな成長モデルをなぞるかのように叙述されているが、一応そうした大雑把なシェーマがひけるとしても、いざその歴史的実を跡づけるとなるとはそう簡単ではない。

国とは一体何であり、それはどのような契機によって発生しうるものなのか、あるいは又、国家とはいかなる組織や機構をもち、いかなる王や王権によって運営されてゆくものなのか。そうした国家の発生のメカニズムやその実態、あるいはその内的機構の変遷を詳細に説明するとなると、現実問題としてはむしろ不可能に近い。あらためていうまでもないことだが、古代史資料は後の時代のそれにくらべて極端に少なく、それも国家黎明期の研究など

となると、具体的史料など皆無にちかい。いきおい、文献以外の金石文や木簡などの文字資料、考古学や文化人類学などといった隣接諸学の研究成果に大きく依存せざるをえない。その結果、そこに紡ぎ出される古代史像はどうしても、断片的なものの周縁的なものによって組み立てられた、イメージ化された虚像を含むものであることがきられない。そうしたイメージが時には豊かな仮説を生むこともあるが、イメージの先行は単なるドグマとして固定観念化し、むしろ研究の弊害となることも多い。最近の吉野ケ里遺跡の発掘成果とその報道をみても、この遺跡が紀元一世紀のものであるにもかかわらず、強引に卑弥呼や邪馬台国と関連づけられて趣味的、ロマン的な古代史ブームを再燃させたことも記憶に新しい。

とはいえその反面、最近の考古学的研究の進展はめざましく、史料を伴わない時代時期の史的解明に重要な寄与をつぎつぎと提供しつつある。とりわけ、国家の黎明期と重なる弥生時代中・後期から古墳時代にかけての、列島全体にわたる考古学的な発掘調査とその歴史的事実は、日本の国家形成史の端緒を解明する上で、数々の重要な問題提起をつぎつぎとつづける。これまでどちらかといえば想像をたくましゅうし、それによって肉づけせざるをえなかった有史以前の原始社会を、新たに発見された物と人との交通という具体的な事物の世界を介して、われわれの目にアクチュアルでビジュアルな歴史像として浮上させつつあるからである。

このように、考古学的成果はこれまで未知であった歴史的諸問題にあらたな光を投げかけつつあるが、そうした研究成果を誇大視することも矮小化することもなく、よりふさわしいイメージで、文献史料の世界とも矛盾なくクロスさせ、あらたに豊かな歴史的世界を立ち上げようものとならなければならぬ。そして、そうした歴史像がさらに有史時代以降をも、より豊かなものとする視座を提供しうるかどうか、考古学的研究の示唆する問題点の的確な読みとりと、その適切な歴史的位置づけこそが今真に問われているといつていい。こうした科学的根拠を

もった考古学的成果の重要性はいくら強調してもしすぎることはないであろうし、その、有史以前の原始社会や古代国家成立の未知の部分の解明に果たす役割も、今後益々大きなものとなってゆくであろう。そうした反面、今後、科学的技術を駆使した発掘調査による情報の多量化と多様化という事態が急速に進むに従って、私たちの側の真の歴史への道を拓く総体的な把握や総合的な判断が加速度的に困難なものとなってゆくであろう点にも十分留意すべきである。新しいデータ群を創造的な仮説へと変換せしめるために、歴史的研究の対象に対する更なる深い理解と、それに対する的確で柔軟な総合的判断をより強靱なものとするべく鍛え上げ、逸脱をゆるさないより豊かで自由な発想や相互往還的思考こそが今強く求められていることに自覚的であるべきだと思える。

さて、近時の、考古学的成果の古代史学へのとり込みに際しての、あるべき態度あるいはその方法といった原理論的な言及にいささか深入りしすぎたが、話を本論にもどそう。

累述したようなめざましい考古学的成果に依拠していえば、既述のように、国家史的視野からみたわが有史以前の古代社会における画期は一世紀、三世紀、五世紀という三期に、より顕著に見出しようと思う。

すなわち、多くの考古学者の指摘にあるように、弥生中期といわれる紀元前後一世紀という時期は、私たちが考える以上に成熟した文化や政治をもった時代であったことが明らかにされている。この時代は、『漢書』『地理志』にはじめて登場する百余国に分立した倭人世界の時代、『後漢書』『東夷伝』のあのよく知られた光武帝から金印授与をうけた「奴国」の記事のみえる時代に対応している。「倭国」「倭王」はまだ見えない（なお、国家史の端緒をのべるところで再説）。国家史的には未成熟だが、北部九州の「奴国王」にみられるように、地域集団の最高の支配者たる「王」もうまれ、彼は中国にも入貢し、稲作をし金属器を使い、この北九州を生産センターとする高文化をわがものとし、その文化は点在しながらすでに西日本全体をおおって広がっていた。

それにつづく、弥生時代中・後期から古墳時代前期への移行期は、そうした成熟した社会を背景に、各村落内部の首長や族長が次第により広域の支配者として転成してゆき、さらにそうした支配者たちが相互の交通と、それに絡む戦争のくり返しの中で、かなり広域で緻密な組織体としての地域国家を作りあげてゆく。そうした戦乱に倦み、新しい平和的秩序を志向する各地の首長層の中でとりわけ、大和と河内を中心とする畿内勢力がその影響力を次第に全国に浸透させていった歴史過程を、確度の高い足どりとしてトレースすることが可能となってきた。

このように、弥生時代中・後期以降、つまり一世紀から三世紀にかけて、列島は戦争の時代であった。そして、この戦争のくり返しの中で、社会の構造も変化し、貧富を伴う階級社会も形成される。この戦争というものが、最も徹底した極限としての交通形態だと考えてよければ、弥生中・後期から古墳時代前後にかけて認められる、弥生式墓制としての方形周溝墓から前方後円墳への飛躍的転化、軍事的防衛施設としての性格をもつらしい高地性集落や環濠集落の建設、金属製品の普及とその生産の問題、土器にみられる地域間の移動の問題など、重大な社会的激変をものがたる具体物が目じろおしである。金属器の列島内での製作はこの中期に始まるとされているし、つづく弥生末期には東海地方の土器が関東地方にまで流入している事実も報告されている。つづく古墳時代前期には、近畿周辺の土器がすでに関東地方に伝播受容されていることも報告されている。こうした考古学成果の事実をまさに手にし、そうしたものの伝播や移動、あるいはそれらに確実に伴ったであろう様々な物資の流通などを思いあわせる時、この三世紀という時期の政治社会の歴史的展開相のありさまが急速に現実味をおびてみえてくる。

倭の女王ヒミコはこうした二、三世紀という文化史的社会的画期を背負って、突如この列島に出現する。ヒミコは二世紀末、一八〇年代の「倭国乱」に際して、ヤマト国を中心とする近畿諸国連合の大人層に共立されて倭国の女王となり、戦乱を收拾させたとされている。この前後の列島内の政治情勢を山尾幸久はダイナミックに次の

ように描き出している。少し長くなるが、ヒミコ登場の東アジアの国際環境とそれに深くリンクした歴史的背景および、その過渡としての政治経済的特性を正確に把握する上で必要不可欠のシェーマと考えるので、煩をいとわず紹介してみよう。

このヒミコが初めて共立される七、八十年前の二世紀初葉から前半にかけて、北九州博多湾を中心とする「奴国」連合ないしツクシ政権は、朝鮮半島の楽浪郡を後楯に最盛期をむかえ、鉄の独占的移入を手中にし、山陰、瀬戸内沿岸地域とも接触をもちつつ当時、政治的文化的先端地域を形づくっていたものと思われる。そしてこの地域の列島内での文化的経済的なものの波及が、瀬戸内のキビ地域政権や畿内中枢のヤマト地域政権の発達の契機となつたらしい。

ところが二世紀後半、楽浪郡の政治的統制力が急激に衰え、その余波で朝鮮半島では政情不安が慢性化し、南部朝鮮の有力集団なども日本海山陰沿岸から畿内中枢地域へと広く進出移住してきたと想定される。この頃ヤマト政権はキビ政権と連繫し、ツクシ政権を統制し、鉄輸入をはじめとする対外的通交権の独占体制を継承し、初めて楽浪郡に通じた。こうした新しい歴史的条件下、ヤマト政権を支える首長層たちの間で、その序列再編をめぐる内乱状態が出現する。この事態の収束のために女王ヒミコが擁立された。

つづく三世紀の中頃、ヤマト政権は伊勢湾沿岸から瀬戸内沿岸にかけて点在したとみられる二十一余りの首長国すなわち部族連合体の政治経済的宗教的結合体の核たる位置を占めるようになる。それはヤマト政権が、中国皇帝を中軸とする東アジア政治秩序の中で、倭人種族の全体を代表する王権として、はじめて認知された唯一の地位「倭王」を擁しており、対外的交通や鉄の独占的輸入が、この「倭王」を窓口に集約されるという事情が伴っていたからである。この期のヤマト政権とツクシ政権との関係は、政治的宗教的統合といったようなものではなく、軍

管区司令的な役人を派遣するといった統制的なそれであった。

初代女王のヤマトのヒミコの死後、ヤマト政権は男王を推戴するが、再度、内乱状態を将来する。この乱の収束のため、初代ヒミコの血族から「台与<sup>とよ</sup>」なる少女が選ばれ、二代ヒミコとなって、女王―男弟制を再現してそれを克服する。

さて、ここからは当面のヒミコの女王権の分析事項からは少々離れることになるが、山尾はヒミコ的なこの女王―男弟制が三世紀末から三、四世紀の交にかけて、女王―男王制へと移行したと考えている。つまり、この三世紀の後半から末にかけて、これまで不安定であった男王の就任のあり方を克服すべく、男王の就任儀礼つまり首長権継承儀礼なるものが創出されるにいたったとする。そして、この列島はヤマト国たる近畿を中枢に、伊勢湾沿岸から、山陰、瀬戸内、北九州にかけての諸勢力との結びつきをより緊密にし、先の首長権継承儀礼の共有をめぐって新しい段階を迎えたと考える。このことがヤマトを発進地として急速に全国に伝播する前方後円墳の出現という現象と重なりと見るのである。

二世紀の後半から百年以上もつづいてきた慢性的戦乱状態を克服すべく、新しい秩序原則に基づく平和が志向され、ヤマトの男王の政治的求心力への期待を込めて、政治的象徴物としての前方後円墳とその体制が創出される。

『大和の平和』<sup>パックス・ヤマト</sup>はこうしたヤマト政権を中心とする政治的・宗教的秩序の成立によってもたらされたと。

これから先は当面の論述にかかわることが少いので結論の粗略だけで先を急ぐが、ヒミコ的王権体制からの脱却後、四、五世紀のヤマト政権は部族連合体の組織上の機関として、神事祭祀の機能を果たす女王と、外交軍事的機能を果たす男王との聖俗二重王権システムをとっていたと山尾は考える。その後半の五世紀、男王を主体とする軍事的側面が女王を主体とする祭祀的側面に優越してゆくという歴史的趨勢の中で、最高守護神の祭場の伊勢への移

動とそれに伴う齋王制が企図され、女王位は廃絶されるとみる。この期はちょうど、岸俊男が名づけた「画期としての雄略朝」にあたり、彼がいわゆる倭の五王のうち、最後の倭王「武」という名称で、南宋にたびたび入貢して冊封を受けた五世紀後半代に該当する。

これによって、六、七世紀における、祭政を統合した大王と王妻Ⅱ太后との関係に移行する端緒が開かれたとみて、山尾は三々五世紀の政治形態の変容の跡づけをおえる。

さて、こうした王権の推移と位置づけにたつて改めて、小稿の眼目たる、二、三世紀のヒミコの女王権の問題に的を絞って、その特殊な過渡的王権の内実を詳しく検証してみよう。

## 2 ヒミコの王権——その出現の経緯

前節までで述べたように、一世紀から五世紀にいたるブレ・古代王権、ブレ・ヤマト王権とでもよぶべき王権前史の中で、二世紀末のこととされる、ヤマトイ国に都するヒミコという女王が倭国の女王として過渡期に共立されるそのあり方は、中国の史書が注意を払ったように、東アジア世界においていささか特異な現象であったといえる。中国の久しい王朝史の中で「女王」なるものは、いまだかつて存在していない。朝鮮半島でも新羅の三人を除いて他には一切見えず、このヒミコ記事が倭国を特徴づける一種の特ダネ記事的扱いに与るものらしいことがわかる。このいわゆる「倭国」連合の共立する女王ヒミコをクローズ・アップし、拡大鏡にかけることで、古代国家の黎明期における宗教と政治の関係、聖俗二重王権あるいは、山尾幸久のいう「祭政二元の宗主国体制」とでもいうべき、この王権の内包する歴史的意義および、女性の社会的地位、機能、性質などについてより詳しく分析を加えるとともに、この女王権の特殊「倭国」的な過渡的様相について考えてみよう。



ところで、この二、三世紀のヒミコの王権を祖上にのせ、具体的な考察にかろうとすれば、「邪馬台国」「卑弥呼」「倭国」などの訓みの問題あるいは、「邪馬台国」の所在、位置論を避けてとおるわけにはいかない。ここではその論証を詳しく紹介する紙幅もないので、西嶋定生、吉田晶、山尾幸久らのすぐれた先学史家のきわめて蓋然性の高い仮説に依拠しながら、「邪馬台国」の「女王卑弥呼」の孕みもつ問題点をクリアーに提示しつつ、上掲の問題点などについて若干の考察を試みてみよう。

まず、『魏志』『倭人伝』のうち、当面問題となる部分をまずひとまとめにして掲出しておこう。よく知られている個所も多く、改めて引用するのもはばかられるが、固有名の重要な訓みとも関連するので、女王権の特徴をなす分析に不可欠な部分とともども、山尾幸久の釈文に従って示してみる。

(1) 倭人は帯方の東南大海の中に在り、山島に依りて国邑を為す。旧は百余国、漢の時に朝見する者有り。今使訳通ずる所三十国なり。(中略)

(2) 南して邪馬台国、女王の都する所に至るには、水行十日・陸行一月。官に伊支馬有り、次を弥馬升と曰い、次を弥馬獲支と曰い、次を奴佳鞮と曰う。七万余戸可りなり。女王国自り以北は、其の戸数・道里略載を得べきも、其の余の旁国は遠絶にして詳を得べからず。(中略)

(3) 其の国、本亦男子を以て王と為す。住まること七、八十年にして倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為し、名づけて卑弥呼と曰う。鬼道を事とし能く衆を惑わす。年已に長大なるも夫増無く、男弟有りて国を治むを佐く。王と為りし自り以来、見ることに有る者少なし。婢千人を以て自ら侍らしめ、唯男子一人有りて飲食を給し、辞を伝えて出入りす。居る処の宮室は楼観・城柵を嚴かに設け、常に人有りて兵を持して守衛す。(中略)

(4) 景初三年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わして郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求めしむ。太守劉夏、吏を遣わし將い送りて京都に詣らしむ。其の年十二月、詔書して倭の女王に報いて曰わく、「親魏倭王卑弥呼に制詔す。帶方太守劉夏、使いを遣わし、汝の大夫難升米、次使都市牛利を送り、汝献する所の男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉じ以て到らしむ。汝の在る所踰かに遠きも、乃ち使いを遣わして貢獻す。是れ汝の忠孝、我甚だ汝を哀しむ。今汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬を假す。(中略)」

(5) 卑弥呼以て死す。大いに冢を作ること径百余歩、葬に徇する者奴婢百余人なり。更に男王を立てしも國中服さず。更に相誅殺し当時殺すもの千余人なり。復た卑弥呼の宗女の台与、年十三なるを立てて王と為し、國中遂に定まる。(中略)

右の山尾の訓読部分(いわゆる万葉仮名と名づけられる、日本語を表記するために表音文字として用いられた漢字)にみられるように、「邪馬台国」は後の畿内、大和すなわち奈良盆地を中心とする地域をさす。中国王朝に入貢し冊封をうけていることからしても、平野邦雄のいうように、このヤマト王権は門戸、外港としての河内、摂津を統制下におくことができるけれども、そもそも王権として成立する契機をもたないということになる。さらに山尾幸久は「卑弥呼」は「姫子」ないしは「姫御子」だとし、「彦子」とセットをなす地位についての尊称だとしている。そしてこのヒコ・ヒメは元来、神秘的な靈力をもつ男・女の意味であったものが、王権位の尊称として転用されたものと解している。そして、このヒメコについて地位を継承した「台与」(「豊」―実名の一部か?)も二代目「ヒメコ」と呼ばれたものと推察している。

さて、このヒメコはしばしば「邪馬台国の女王卑弥呼」と呼びならわされるが、西嶋定生が注意を促すように、「倭人伝」を忠実に読むかぎり、「邪馬台国の都するところの卑弥呼が倭国内の諸国の大人たちによって共立され

て、倭国の女王となった」ということなのであって、「卑弥呼」が「邪馬台国」の「女王」であるなどとはたしかに書かれてはいない。又、西嶋が示唆するように、ヒメコが「共立」されたと書かれている以上は、この「倭国」が集団国家ないしは連合国家であったことを明示している。しかもこの「倭国」は「卑弥呼」が「共立」される以前、「男子を王として、七、八十年、倭国乱れる」とあるので、この「倭国」連合なるものは、二世紀初頭にはすでにこの列島に出現していたということになる。

このあたりの叙述をまとめてひらたくいえば、ヤマト国のうち、最も狭義のヤマト、すなわち奈良盆地中の三輪山山麓の地に宮都をおいたヤマト国のヒメコが「倭国」が乱れて戦争になったので、それを收拾するために諸国の大人たちによって共立され「倭国」の女王となったと説明されていることになる。

ただこの世紀から三世紀にわたる倭国連合なるものは、のちの畿内を中心に西日本全体にわたる政権というようなものでは恐らくなく、畿内を中心とするヤマト政権、瀬戸内海のキビ政権、北部九州のツクシ政権などといった、西日本を中心に点在する多核的地域的な政権が、政治・経済的なものを紐帯として結びついた一種の連合政権的な形態をとるものであったろうと考えられている。

ただ、こうした連合政権的な結びつきをみせる中で、それ以上に注目されていることは、「狗奴国の男王卑弥呼」とあったり、北部九州の「(大)官」も「卑狗」とあったりして、地域差をこえて、ヒコ・ヒメ的な共通の和語が成立しつつあるらしい状況を示していることである。逆にいえば、一世紀来の倭国連合政権の出現それ自体がその内部に共通言語を既に醸成しつつあったことを示す証拠ではないだろうか。森浩一は中国語音韻学者森博達らによる三世紀当時の中国語の復元的音韻にもとづいて「倭人伝」をよみ直そうとする新しいアプローチの成果を援用して、すでにこの頃、いわゆる万葉仮名の先行形態を想定し、いわば一種の倭国の共通言語の成立を示唆している。

資料も限られ、極めて解明困難な課題とはいえ、貴重な分析視角の呈示として真摯にうけとめ捉え直す必要がある。

今日なお、こうした国家の発生の契機をなすもの、あるいは言語や宗教といった共同幻想の基盤をなすものについての国家レベルの究明がわきわめて不十分なままであると思える。国家の発生は、そうした共通する言語や宗教といった、その社会や文化の基層をなすものと不可分である。それが原始社会とか前古代国家といったはるか昔のことであればあるほど、それら政治的諸連合をとり結ぶ首長間には、共通する言語なり宗教なりといったものを介する共同幻想的なものが、一種の精神的な紐帯として共有されていなければならないからである。そして先述のように、この時代がくり返された戦争の時代であり、戦争というものが徹底した極限としての交通形態だとするのなら、この二、三世紀は上でのべた共通言語の成立や文化複合が急速に進んだ時代だったと考えていい。そして、ヤマト政権あるいはキビ政権、ツクシ政権といった地域地域の政治連合体は多核的に点在し、その地域性を色こく残しながらも、相互に利害を共有し、鉄器や土器あるいは甕などのより高度な利器を求めて往来移住し、あるいは塩をはじめとする食糧や衣料といった様々な生産物の交易をくり返し、言語によるコミュニケーションや物資流通のシステムをつくりあげていったものと思われる。

大陸に対して圧倒的に有利な地理的条件下にある北部九州は、すでに紀元前一世紀には他地域にさきがけて鉄器の使用が急速に進んだらしい。そして二、三世紀には北部九州から関東地方まで鉄を日常的に用いるようになるという。鉄の需要の増大に伴って当初、朝鮮半島の弁辰地域からの輸入に大きく依存していた鉄の供給は、当然のことながら北部九州地域との関係の中でその入手がはかれることになる。二世紀末のヤマト政権がツクシ政権をその統制下に置いたとされるのも、そこからの鉄の需給の問題とも深くからんだ政治経済的なヘゲモニー争いによる

ものであったとみていい。とり急ぎまとめていえば先の森博達らによる原音韻論的アプローチや、平野邦雄などによる半島の鉄と倭国の塩という塩鉄交易論などの提起がなされているが、これらは難解な国家成立史研究の欠落部分を補うたしかな試みとして、今後も着実な研究が積み重ねられてゆくべき分野であろう。論が少々協道へそれた感があるが、次節ではヒメコ王権の宗教的権威の内実をほり下げて分析検証してみよう。

### 3 ヒメコの女王権——宗教的権威の起源

さてここで、ヒメコの女王権という、特殊倭国的な、特殊二、三世紀的な政治宗教的システムについて、しばしばこれについて引きあいに出されるヒメ・ヒコ制なるものとも合わせ考えながら、より詳しく検証してみよう。

ところで、この共立された「倭王」ヒメコを推戴する倭国首長連合体なるものの実態をクリアーにするために、中国の側の記録から、二世紀末のこのヒメコ登場にいたる「倭人」「倭王」「倭国」などのあらわれ方、あるいは扱われ方の歴史的推移をざっと通観しておこう。

『漢書』『地理志』では、紀元前後、倭人社会は百余国に分立していて、中には朝貢してくるものもあったと記されている。この百余国が列島全体にわたるものか、九州北部などにとどまるものか、にわかに決定しがたいが、『後漢書』『東夷伝』には紀元五七年、「倭の奴国王」が後漢に入貢し、光武帝より印綬を授与されたとの、よく知られた記述がある。又、一〇七年にも「倭王国」帥升らがやはり朝貢したとの記事をとどめている。『後漢書』は『三国志』よりも後の成立で、記事内容も『三国志』からの孫引きという事態も考えられないが、一応オリジナリティを有する記事と考えれば、この記事は『魏志』『倭人伝』の伝える、「倭国」は「もと亦男子をもって王となす。とどまること七、八十年にして倭国乱れ、あい攻伐して年をへたり。すなわち共に一女子をたてて王とな

し、名づけて卑弥呼ひめこという」という紀元一世紀頃の状況とも大きく矛盾するところもない。そしてこの「ヒメコ」が上述のように畿内ヤマトのいわゆる「ヒミコ」に他ならぬとすれば、先の『漢書』の百余国に分立していたとの情報は、九州地方のみならず、倭人社会全体にわたるものと解する方がより矛盾が少ないといえる。とすれば、倭人社会は紀元前後、百余国にわかれていたが、「倭人伝」の三世紀中頃には三十余国に統合されていたことになり、この点についても整合的につながる。すでにくり返し上述してきたように、弥生時代中・後期の一世紀から三世紀は戦争にあげくれた時代であつて、さまざまにくり返される戦乱の中で弱小国が強大国に次第に吸収合併されていたであろうことは想像にかたくない。こうした歴史的推移の中で、倭国の女王ヒメコの王権も形成された。この王権の樹立を「倭人伝」は上掲のように状況説明したあとで最もよく知られた部分である、「ヒメコは」「……鬼道をこととしよく衆を惑わす。年すでに長大なるも夫壻なく、男弟ありて国を治むを助く。王となりしより以来、見ることある者少なし。婢千人をもつて自ら侍せしめ、ただ男子一人ありて飲食を給し、辞を伝えて出入りす。居所の宮室は楼観・城柵を蔽かに設け、常に人ありて兵を持して守護す」とつづける。そしてこのヒメコの亡くなった後、戦乱が再発し、ヒメコの宗女、十三才の「台与とよ」をたてて二代目ヒメコとし、乱の收拾をはかったとある。そしてつづく四世紀は、前方後円墳が出現して男王位による首長権継承儀礼も創出され、その共有関係のネットワークも広がって、政治的・宗教的にも一転して安定期を迎える、というように時代は展開する。

こうした経緯から、この過渡的な祭祀的女王権を規定し特徴づけることとして、次のような諸点が問題点としてあげられよう。

(1) 二世紀後半のきわめて不安定な日常化した戦乱状態の中で、こうした政治的危機を回避する唯一の方法として、超絶的女王権を仰ぐという具体的方策が、共立という首長層の合意のもとにとられたのはなぜか？　そして事実、

この特殊な神事祭祀の女性最高司祭者を推戴することによって六、七十年ばかり平和が維持されたところがあるが、それは何故か？ それとも関連して、常々このヒメコがシャーマン的な女王であり、その呪術的な特異な能力によって諸政治集団間の矛盾を收拾すべく擁立されたとされる。しかし、このヒメコの王権はきわめて不安定で、まだ世襲的な王権あるいは、公権力として確立していなかったとされるが、そうした見方はあらゆる歴史過程を常に過渡的現象とみなしてすまず余りに安易な史的解釈とはいえないか？ そうした点を含めて、男王権を否定し、新宗教による女王王権を超越的地位におくこの新体制成立の道筋を、きちんとこの時代の文脈の中でたどり直しておく必要がある。

(2) このヒメコ王権の女王―男弟というシステムはどのような機構を内包しているのか、いわゆるヒメ・ヒコ制なるものとのどこが共通し、どこがちがうのか？

(3) 外交に関しては、ヒメコは一貫して従前どおり開明性を維持しているかにみえるが、それはハイパー司祭女王権の変革に比して、どう捉え直せばよいのか？

こうした疑点を含めて、ヒメコ女王王権の特質を考えると、このヒメコの王権が祭祀儀礼的なものを共同体社会維持に不可欠の要件とするような社会を背景として生じたものであることをまず、おさえてかかる必要がある。すなわち、男王の下での現実の政治世界とは別に、共同体的社会やその秩序を運営維持してゆくために、聖なる女性⇨神の妻を介して守護神の意思や超越的神意を問い、それによって共同体の意思決定をするというような、共同的祭儀がその伝統社会のベースに存在していなければならないということである。その上で、にもかかわらず、男王を設けずあえて女王王権を突出させて倭国内の政治的社会的システムの安定を企図したこの特殊性について考えなければならない。つまりこのヒメコの王権が前近代的な社会の祭政一致システムに背馳しない保守性を内包し

つつ、新奇の最高の宗教実修者としてのヒメコを戴くことで、新しいより高次の宗教的規範や紐帯が生み出され、その力学の下に新しい祭祀共同体を構築しようとプランニングされたものであったにちがいない。その一方で、新しい鉄製武器に象徴される男王たち首長層たちに結集する軍事的エネルギーが日々増大しつづけるという現実の中にもあった。そうした現実とは逆行するむしろ反動的なまでの方法や形式をとって、神の声を媒介する女王ヒメコを平和のシンボルとしその下に宗教的統合をはかろうとした。たえず抗争を挑みヘゲモニーを争う男たちの戦乱のエネルギーを新しい宗教的システムによって、押さえこみ融和させようとする変革の試みであったと位置づけうる。ヒメコの存命中、千人の宮廷巫女団を従えた彼女が執行したであろう、日の神 $\parallel$ 太陽霊をかたどったとみられる銅鏡をめぐる新しい祭儀は何らかの呪的な聖なる力 $\parallel$ 権威を具現し、いわばその共同幻想としてのイマジネーションの力が政治的危機を回避し、首長層の戦争意欲を一種抑止する力として働いたのかも知れない。このように女性最高司祭者の地位を設けることで内紛を一時おさめはしたが、それはあくまでも妥協的産物であり、過渡的な施策であったにすぎず、聖俗二重王制の脱呪術化と、その政治的・宗教的秩序化や様式化は、五世紀という時代まで待たねばならなかった。ヒメコの死後ふたたび同様の内乱的事態を将来したことが、そうした宗教的改革の過渡的性格を証しだてもいる。ともあれ、三世紀に入つての銅鏡祭儀の急激なる盛行あるいは、三世紀末に突如として大和の盆地に出現し、たちまちのうちに壮大化し全国に伝播してゆく前方後円墳築造のあわただしさは尋常ではなく、ヒメコの時代があらたな宗教儀礼の展開期として、その幕をきつておとす時代であったことをよく物語っているといえよう。

ところで、このヒメコの叙上のような祭祀面でのミステイックな性格に反して、彼女のとる外交面でのそれは一貫してきわめて開明的なものであったといえる。このことはヒメコの王権自身がオープンな性格を示すといったこ



とはなく、外交面においては首長層間での合意づくりの既定路線があり、それに従ったままでの現実であつたろう。具体的な外交場面でもしばしばその名をとどめる実力者「難升米」をはじめ、倭国内の「大人」層たちは、開かれた大陸外交堅持の立場を貫いたのであろう。三世紀という倭国にとつての動乱の時代は、中国帝国、朝鮮半島諸国にとつても激動の時代であつた。そうであればこそ、自閉することなく、鉄を調達し、新しい技術をわがものとし、新しい情報や先進文物をたえず将来することを可能たらしめるためにも、開国しづけることが宿命づけられた時代でもあつた。

いささか結論づけていえば、ヒメコの女王権は、自ら宗教的權威を演出し発動することで、生産力の向上を背景に、深刻な矛盾と利害を抱えこみはじめた部族首長層たちの権力闘争を回避させ、何とか倭国連合という一枚岩にたばねるために、そこに居合わせた首長たち大人たちに聖なる狂熱という一体感をかきたてる政治的装置として機能したのだといつてもいい。

さて、この小稿のしめくりとして、しばしばこのヒメコの王権について言及されるヒメ・ヒコ制的システムとの関連について論述しておこう。

普通一般に、このヒメ・ヒコ制とは、姉妹および娘などが兄弟および甥などを靈的に守護するという信仰を基盤にして、政治的な面を兄弟や男が、宗教的な面を姉妹や女がになうとする相補的分掌体制のことをいう。そもそもこの彦姫制なるものは、古琉球の尚氏王朝におけるキコエ大君と国王との関係をモデルに、これを聖俗二重王制とみなすことに始まつた。古琉球では、国王の姉妹がキコエ大君と呼ばれる国家的最高巫女として多数の巫女団を従えつつ、国王の政治を宗教的に守護し指導したとされる。そして、今も沖縄社会に根づく残るオナリ神信仰などについて、沖縄学の伊波普猷や佐喜真興英などが紹介し、民俗学者、折口信夫や柳田国男によつて、「ヒメ・ヒコ

制」なるものとしてうけつがれてきた学説である。最近の倉塚曄子をはじめとする、研究者たちの理解もこれと大差はない。このヒメ・ヒコ制なるシステムはプレ・モダンの原始社会の王権を特徴づける史的用語としてしばしば使われるが、古代社会に實際にあつた政治制度的なものとして具体的に認知されているものでもない。先述の折口や倉塚らは、古代の采女制や斎宮制は、このヒメ・ヒコ制が解体してゆく過程で再編されたその形骸化した制度と位置づけている。このヒメ・ヒコ制なるものは、神話や伝説、歴史伝承の中に様々な形で埋めこまれて残存するとされ、サホビメ・サホビコの物語やヤマトヒメとヤマトタケルの物語はその好個の例としてしばしばとりあげられる。更に、アマテラススサノヲ、神功皇后―ホムツワケの關係から、のちのちの推古女帝、皇極（斉明）女帝、称徳女帝などの女帝王権をもこれに含めて論じられることもある。このヒメコもその男弟とともに、ヒメ・ヒコ制のティピカルなもの、あるいはその原初形態を示すものと位置づけられたりもするが、この「倭人伝」の記述に從うかぎり、ヒメコ女王は治政者にして補佐役の男弟に比して、対等ではなくはるかに優位する絶対者に位置づけられている点には十分注意が払われてよい。女王―男弟という上下關係に明記され、一切の日常性を禁じられた「持<sub>レ</sub>衰<sub>い</sub>」にもいた齋戒生活を永遠につづける女王ヒメコが「鬼道をこととし、よく衆を惑わす」のは、託宣力に卓越し、その神意をおびたカリスマ性が人を妖惑してやまなかつたからであろう。巫女性をもつ女王ヒメコの宗教は、倭国諸国連合の平和のシンボルであり、彼らに対して優位にたつ統合された守護神として諸国の首長層、大人層をたばねるミステイックな力を持ち、集団間秩序を維持する装置として機能している側面を見のがすべきではない。そうした意味でヒメ・ヒコ制的な分掌体制的なものとは本質的にちがっているといつていい。ただ山尾幸久が示唆するように、五世紀代にはじまる聖俗二重体制Ⅱ祭政二元構造への過渡的形態を示すものとすれば、それはそう位置づけられるかもしれない。

ところで、このヒメコの宗教的性格については、東アジア北方系の原始シャーマニズム的なものに淵源すると思われる者、あるいは重松明久などの提唱する道教的性格を重視する説、あるいは吉田晶の説くような道教的要素をとり込んだ新しいタイプのシャーマンとみるような説、あるいは山尾幸久のように、新しく朝鮮半島あたりから伝播してきた銅鏡祭祀が旧来の銅鐸祭祀と習合してできた一種の新興宗教とみ、ヒメコはそれの実修者にして最高司祭者として、神の意思を媒介する役目をおった神の妻⇨人神的存在とする説、また民族学者、大林太良のように南方系の聖俗二重王権のうちの「見えない神聖王」⇨女性宗教王とするような見方、あるいは古琉球の尚氏王朝における「聞得大君」と国王との関係に類似するわが古代に存在したヒメ・ヒコ制の初源的形態だと見るような説など、多種多様である。女性のもつ宗教的権威の起源ともからんだ国家的祭祀という観点からいえば、女王ヒメコは記紀神話のアマテラス像と分かちがたくイメージを共有していると思われる、今は山尾幸久の示唆する銅鏡祭祀を主体とする新興宗教的なものとみて、更なる後考の課題としておきたい。

#### 〔参考文献〕

\*考古学関係

森浩一『巨大古墳の世紀』岩波新書 一九八一年。

原島礼二編著『巨大古墳と倭の五王』青木書店 一九八一年。

近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店 一九八三年。

都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 一九八九年。

白石太一郎編『古代を考える 古墳』吉川弘文館 一九八九年。

鈴木靖民他『伽耶はなぜぼろんだか』大和書房 一九九一年。

都出比呂志「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』三四三号 一九九一年三月。

西嶋定生他『巨大古墳と伽耶文化』角川選書 一九九二年。

茂木雅博『前方後円墳』同朋舎 一九九二年。

森浩一『考古学と古代日本』中央公論社 一九九四年。

近藤義郎『前方後円墳と弥生墳丘墓』青木書店 一九九五年。

\* 日中・日朝関係史

大庭脩『親魏倭王』学生社 一九七一年。

岡田英弘『倭国の時代』文芸春秋社 一九七六年。

岡田英弘『倭国』中公新書 一九七七年。

福永光司『道教と古代日本』人文書院 一九八七年。

山尾幸久『古代の日朝関係』塙書房 一九八九年。

井上秀雄『倭・倭人・倭国』人文書院 一九九一年。

\* 邪馬台国関係

石井良助他編『シンポジウム 邪馬台国』創文社 一九六六年。

大林太良『邪馬台国』中公新書 一九七七年。

森浩一編『倭人伝を読む』中公新書 一九八二年。

森浩一編『倭人の登場』（日本の古代1）中央公論社 一九八五年。

山尾幸久『新版・魏志倭人伝』講談社現代新書 一九八六年。

直木孝次郎他『邪馬台国の謎に挑む』学生社 一九八八年。

西嶋定生『邪馬台国と倭国』吉川弘文館 一九九四年。

森浩一『倭人・クマソ・天皇』（森浩一の語る日本の古代1）大出版社 一九九四年。

岡本健一『邪馬台国論争』講談社選書メチエ 一九九五年。  
吉田晶『卑弥呼の時代』新日本新書 一九九五年。

\* 日本古代史関係

石母田正『日本の古代国家』岩波書店 一九七一年。  
山尾幸久『日本古代王権形成史論』岩波書店 一九八三年。  
平野邦雄『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館 一九八五年。  
重松明久『古代国家と道教』吉川弘文館 一九八五年。  
西嶋定生他『空白の四世紀とヤマト王権』角川選書 一九八七年。  
平野邦雄『帰化人と古代国家』吉川弘文館 一九九三年。  
鬼頭清明『日本古代史研究と国家論』新日本出版社 一九九三年。  
鬼頭清明『大和朝廷と東アジア』吉川弘文館 一九九四年。

\* ヒメ・ヒコ制関係

池辺弥「彦姫制史料集成」『成城大学短期大学部紀要』一号 一九七〇年一月。  
門脇禎二『采女』中公新書 一九六五年。  
上田正昭『日本の女帝』講談社現代新書 一九七三年。  
益田勝実『秘儀の島』筑摩書房 一九七六年。  
倉塚暉子『巫女の文化』平凡社選書 一九七九年。  
阿部真司『蛇神伝承論』伝統と現代社 一九八一年。  
倉塚暉子『古代の女』平凡社選書 一九八六年。  
松前健『大和国家と神話伝承』雄山閣 一九八六年。  
義江明子『日本古代の氏の構造』吉川弘文館 一九八六年。

小林敏男『古代女帝の時代』校倉書房 一九八七年。

吉野裕子『持統天皇』人文書院 一九八七年。

中村生雄『日本の神と王権』法蔵館 一九九四年。

小林茂文『周縁の古代史』有精堂 一九九四年。

川上順子『古事記と女性祭祀伝承』高科書店 一九九五年。